

都立高等学校の 職業教育の現場から

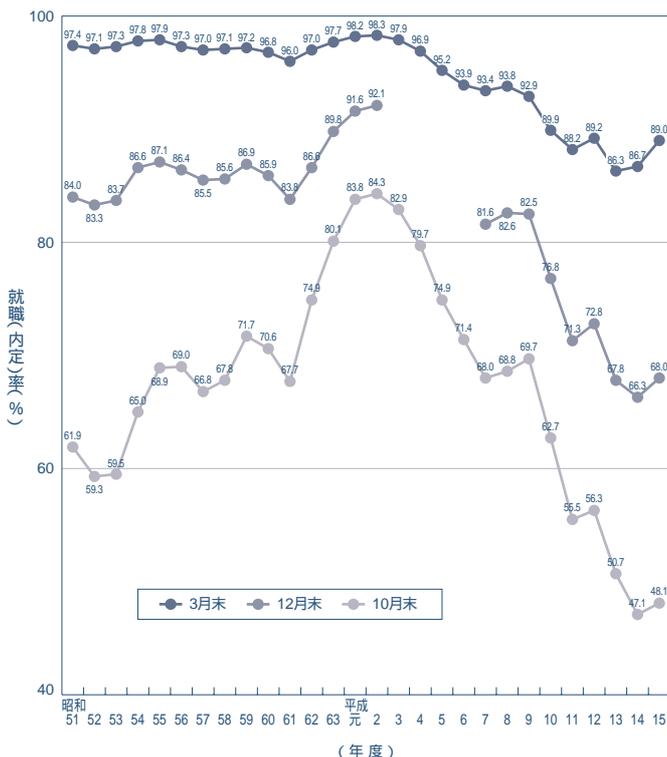
今月号からスタートする、連載の新コーナー「新世紀キャリア形成」。本コーナーは、キャリア形成に関するさまざまな立場の取り組みを紹介し、それぞれの現場から生の声をお届けするものである。

第1回目の今回は、都立高等学校の職業教育における取り組みに焦点を当てる。高卒者をめぐる就業の現状は、文部科学省の調査によると、新規高卒者の就職率が過去最低を記録した一昨年から徐々にポイントを上げてきたものの、未だ厳しい状況が続いている(資料1参照)。その一方で、若年者の職業選択に関する状況も変化しており、『平成15年版国民生活白書』によると、高校卒業後の進路状況は、1996年を境にフリーター比率が就職者比率を上回る結果となっている(資料2参照)。フリーターの著しい増加の背景には、社会状況の変化や高校生の職業意識の変化など、さまざまな要因が絡んでいるも

のと考えられ、それらの現状を改善すべく、今日の教育現場では、生徒にできるだけ早い段階から職業意識を育てる「キャリア教育」の推進が急務となっている。

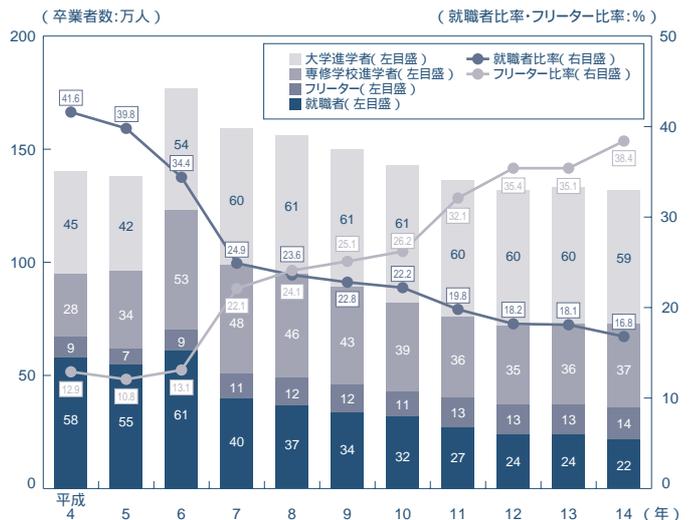
そのような中、東京都では平成9年度から、各高校が信頼される魅力ある学校づくりを目指す「都立高校改革」を進めてきており、進学指導、就職指導、生活指導、部活動など、各高校の特色を活かした取り組みを強化してきている。特に自律的な改革を進めている学校や改善の取り組みに成果を上げている学校に対しては、東京都教育委員会が「重点支援校」として指定している。そこで、とりわけ職業教育に力を入れている学校として選ばれたのが「東京都立足立工業高等学校」である。今回は当校の取り組みをうかがい、高等学校における「キャリア教育」について取材した。

資料1 新規高等学校卒業(予定)者就職(内定)状況



出所：文部科学省資料

資料2 高校卒業後の進路状況



(備考)

1. 文部科学省「学校基本調査」により作成。
2. 「就職者」は給料、賃金、報酬、その他経常的な収入を目的とする仕事に就いた人。自家・自営業に就いた人は含めるが、アルバイトなど臨時的な仕事に就いた人は含めない。
3. 「大学進学者」は大学・短期大学への進学者。通信教育の学制を含む。
4. 高卒の「フリーター」は、進路が未定であることがあきらかな人で、「大学進学者」、「専修学校進学者」及び「就職者」のいずれにも該当しない人。
5. 「就職者比率」は卒業生全体に占める就職者の割合。
6. 「フリーター比率」はフリーターと就職者の合計に占めるフリーターの割合。
7. 「専修学校進学者」には、「専修学校(専門課程)進学者」、「専修学校(一般課程)等入学者」、「各種学校入学者」及び「公共職業能力開発施設等入学者」を含む。

出所：『平成15年度版国民生活白書』

(<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h15/honbun/html/15211010.html>)

地域の産業を支える人材の育成が使命



東京都立足立工業高等学校校長

こばやし ようじ
小林洋司 氏

1978年東京学芸大学卒業。1978年～1981年東京通商産業局(現・関東経済産業局)、1981年～1983年東京学芸大学大学院法学・政治学講座修了。1983年～1984年東京都立水元高等学校講師。1984年～1990年同校教諭。1990年～1997年東京都立足立高等学校教諭。1997年～1998年東京都立向島工業高等学校教諭。1998年～2001年東京都立荒川商業高等学校定時制教頭。2001年～2003年東京都立葛西南高等学校教頭。2003年～2004年東京都立池袋商業高等学校校長。2004年東京都立足立工業高等学校校長(現職)。

近年、初等・中等教育段階におけるキャリア教育の必要性が叫ばれる中、教育の現場では、どのようなことが課題となっており、その課題についてどのように取り組んでいるのか。職業教育において、東京都の「重点支援校」にも選ばれ、地元企業に信頼の厚い、東京都立足立工業高等学校の取り組みについて、校長の小林洋司氏にうかがった。

増える目的意識の希薄な生徒

はじめに、東京都立足立工業高等学校(以下、足立工業高校)が打ち出す特色からうかがってまいりたいと思います。

小林 本校生徒の9割以上が在住している足立区には、4,200以上の製造業があり、日本のものづくり産業の基盤となっています。その足立区唯一の工業高校として「地元企業の中核となり、地域の産業を支える人材を育成する」ことが本校の使命であり、目標です。生徒は、本校で専門の技術・技能を習得し、働く喜びや粘り強く取り組む姿勢を身に付けます。そのような職業教育が本校の特色

であると言えるでしょう。

そうすると、卒業生の多くは進学ではなく就職するのですか。

小林 昨年度の卒業生の進路を見ると、就職は卒業生全体の52.6%で、それが年によっては6割前後まで変動します。就職者の多くは製造業、そして建設業サービス業の順に就きます。ちなみに私は、昨年度までは商業高校にいましたが、商業高校では順番が逆で、サービス業が一番多くなります。

就職以外の生徒の進路は、短大・大学進学が11.1%、専門学校進学が21.5%、あとは進学や就職の浪人がいて、就職も進学も希望しないいわゆるフリーターが3.7%ほどいるという状況です。

この10年ぐらいで、高校生の就職に対する意識は大きく変化しているのでしょうか。

小林 大きく変わっていると思います。例えば10年以上前だと、勤労青少年と申しましょうか、そのような意識が明らかになり、工業高校に入ってくる生徒には、「ものづくりがしたい」、「ものづくりの技術を身に付けて働きたい」という目的意識がありました。同様に商業高校に入ってくる生徒も、「金融機関に行く」とか

「資格を取りたい」という目的がはっきりしていたのです。ところが、現在はそうした目的意識を持った生徒は少ないと言えます。工業高校に来るのも、単に中学のときの成績順で決めることが多いようです。

その背景には、日本経済が豊かになったことがあるのでしょうか。高校を卒業してどうしても家計のために働かなければならないという家庭が少なくなってきた、逆に1、2年は遊んでいても大丈夫という雰囲気がある。卒業は目指すが、その後何をするかは、アルバイトでもしながらのんびり考えようという生徒は確実におり、フリーターが生まれやすい社会状況にあると感じます。ただ、このところ景気の低迷が長引いて、そうした状況も少しずつ変わってきているように思います。

もう一つは、工業高校だけでは専門性や資格という面でやや多様性に欠けるので、専門学校などに進んで、もう少し別の専門性を高めてから就職しようとする傾向もあるようです。

目的意識がはっきりとせず、成績だけで工業高校に入ってきてしまった生徒には職業教育はやりにくいのでは?

小林 その通りです。そこでわれわれは

新世紀 キャリア形成

もう一度原点に帰って、「本当にものづくりがしたいから工業高校にいきたい」という生徒が欲しいのです。そのためにはどのようなPR活動をすればよいのかと検討・工夫しているところです。私も、この足立工業に来て6日目の始業式の日、23年生たちに「目的意識を持ってもらいたい。でないとも高校生活が無駄になってしまう。進学とか進路ということだけでなく、どんなことでもいいから目的を持つように」という話をしました。

目標はフリーターの数を一桁に

東京都では、平成9年度から都立高校改革が始まり、各高校の特色をより分かりやすくするため、目標の数値化という方法を取り入れるなどの試みを行っており、その成果は全国から注目されていますね。

小林 ご存知の通り、都立高校改革の試みのひとつとして、各校の校長は「学校経営計画」(資料参照)を立案しま

す。そしてその計画書の中身はできるだけ具体的に書く必要がある。それが数値目標です。

足立工業高校の数値目標は「フリーターの数を一桁にする」ということで明記しています。先ほどお話しした通り、昨年度はフリーターが3.7%で、卒業生が135名ですから、これは人数にすると5名です。ただ、就職を希望しながらできなかった者が7名いて、これが意味ではフリーター的な面も否めません。この7名を加えると12名ということになります。ですから、今年度は目標の一桁、できれば何とか5~6名あたりで抑えたいと考えています。

フリーターを少なくするために、具体的にはどのような取り組みをしていますか。

小林 専門学校の関係者に業者に講

演を頼んだり、労政事務所の職員やそこを通してご紹介いただいた大学の先生などに、フリーターの不利な労働条件を生徒たちに率直に語ってもらうなどしています。

また、保護者会でもハローワークなどから講師を呼んで講演して、学校だけでなく家庭側からも就職することの大切さを分らせるような指導をしています。

あとは、進路のガイダンスなどの機会に、新聞の記事などを利用して、職業とはどのようなものなのか、正式に勤めた方がフリーターより有利だとか、そういったことを指導するようにしています。

私自身は、普段なかなか子どもたちと接する機会がないものですから、始業式とか終業式というような場を借りて、そうした職業のことについての話をすることに心掛けています。

就業体験で生徒に刺激を与えたい

他に足立工業高校で力を入れて

資料 平成16年度足立工業高校 学校経営計画

1. 目指す学校像

足立区内唯一の工業高校として、「地元企業の中核となり、地域の産業を支える人材を育成する」ことを目標に教育活動を行う。そして、地域に密着した学校として生徒一人一人を大切に育て、あたたかみのある指導を通じて、生徒の自主性を引き出し卒業後の進路へと結びつく教育を目指す。

- (1)地域、中学校との連携を図り、中学生にとって入学したい工業高校をつくる。
- (2)工業人として必要な教養、工業技術の基礎基本や職業観・労働観、技術者・技能者としての感性を身につけた人間性豊かな自主性・積極性・創造性に富んだ人材を育成する。そして、生徒、保護者に信頼される工業高校をつくる。
- (3)生徒の進路希望を実現させ、併せて、地元企業にとって工業教育センターとしての役割を果たす、地域から期待される工業高校をつくる。

2. 中期的課題と方策

- (1)中学校等との連携を通じて教育活動の中身を広く地域にPRし、本校教育の理解者を増やし、結果として入学希望者増へとつなげる。
中学校との教育課程の連携を図り、一日体験入学、招待授業等を積極的に実施すること
小中学校の教職員との連携を密にするための取り組みを進めること
足立区だけでなく、近隣区から生徒を集める取り組みを行う。
- (2)本校の教育活動を充実させ、生徒を大きく成長させるための取り組みを行う。
生徒による授業評価を踏まえ、授業内容のいっそうの充実を図り、特に工業高校として、資格取得へ向けた取り組みを強化すること
生徒の専門性を高めるため、二学期制の導入について、検討を進める。
- (3)生徒の進路先の拡大と地元企業との連携を深めるための取り組みを強化すること。
生徒自身が自信を持って進路の選択・決定ができるようにすること
地元企業と技術力向上のためのパートナーシップを締結すること

3. 今年度の取り組み目標と方策

(1)教育活動の目標と方策

中学校等との連携を深める取り組み

ア. 中学校に対して、専門教科の実習を基礎とした授業を継続して実施する。また、一日体験入学や学校説明会、随時の学校案内を行う。招待授業の実施について検討する。

イ. 中学校での部活動の経験が高校でも継続するように合同練習を施行する。
ウ. 小中学校教員向けの講習会を夏季休業中に開催する。
本校教育を充実させるための取り組み

ア. 資格取得への取り組みを強化する。特に生徒の要望が高い、3級自動車整備士の資格取得のための方策を検討し、条件整備に着手する。

イ. 部活動振興のために施設を整備し、必要に応じ外部指導者を配置する。
ウ. 生徒の読書指導を推進するため、図書館の利用方法を工夫する。また、メディアの多様化に対応する方策を検討する。

エ. 引き続き学習環境、生活環境の整備を図る。生徒相談の機能を充実させる。
進路先の拡大と地元企業との連携を深める取り組み

ア. 地元企業がマシニングセンターを利用することについて検討する。
イ. 都立高等専門学校に対し、4年編入のための推薦枠についての検討を依頼する。
ウ. 理工系大学の指定校推薦枠の拡大を図るための具体的方策について検討する。

(2)重点目標と方策

数値目標

ア.(ア)中学校の教育課程に位置づけられた授業を20時間程度本校で行う。一日体験入学参加者を120名以上に。

(イ)中学校との部活動合同練習を2部以上で行う。

(ウ)小中学校教員参加者30名以上。

イ.(ア)2種電気工事士合格者15名以上を目指す。

(イ)危険物取扱者(乙種第4類)合格者25名以上を目指す。

(ウ)転退学者の割合を5%以下にする。

(エ)選別者の割合を7%以下にする。

(オ)部活動で熱心に活動する生徒を増やす。合宿参加者を目安にして30%以上を目指す。

ウ.(ア)自宅から通学可能な大学(皇間部)の指定校推薦の認定を1名以上増やす。

(イ)フリーターを10名以下にする。

(ウ)推薦入試の倍率2.2倍以上。一般入試常に1.33倍以上

(エ)地域企業がマシニングセンターを利用できるようにするための委員会を立ち上げる。

前年度までの実績及び数値説明

ア.(ア)教育課程の連携は2年目の試み。体験入学は定員一杯の人数を集める。

(イ)昨年度はバスケットボール部で実施

(ウ)2年目の試み。足立区教委の協力が得られている。参加者の増加を図る。

イ.(ア)平成15年度7名合格、平成14年度11名合格、平成13年度10名合格

(イ)昨年度から引き続き講習会実施

(ウ)最近3年間の転退学者の割合は6.9%

(エ)現在6.07%、1日平均30人

(オ)平成14年度合宿参加者30%

ウ.(ア)東洋大1名、日本工大1名+1名、ものづくり大1名

(イ)平成15年度5名、平成14年度6名

(ウ)入試倍率

推薦 一般

平成16年度 2.25倍 1.37倍

平成15年度 2.19倍 1.33倍

平成14年度 2.58倍 1.33倍

平成13年度 2.25倍 1.27倍

(エ)初めての試み

目標達成のための具体的方策

ア.(ア)足立区教委と連絡を取り、西新井中学と1、2学期に授業を行う。

(イ)年内に中学校運動部2部と合同練習ができるよう連絡を密にして調整する。

(ウ)小中学校教員向け研修会を夏季休業中に実施する。足立区教委も内諾済み。講習内容は小中学校と調整する。

イ.(ア)教員は一人一部以上を担当し、生徒の活動を支援する。

(イ)校門指導、朝のあいさつ運動を継続する。

(ウ)生徒の基礎学力定着のため、国数英専門の習熟度・少人数授業を効果的に行う。

(エ)転退者を減らすため、授業、HR、部活動、個別指導、カウンセリング等を通じて、個にあった指導を行う。

ウ.(ア)マシニングセンターの使用法を習熟し、地域企業への貸し出しを検討する。

(イ)大学・専専に対し、指定校推薦枠獲得のための要請をする。

出所：東京都立足立工業高等学校ホームページ(<http://www.adachikogyo-h.metro.tokyo.jp/>)

いる取り組みについて教えてください。

小林 高校は3年という期間が決まっていますので、その限られた時間の中でいかに指導するかを模索していますが、その前段階、つまり中学生に対して、目標を持って工業高校に来てもらうことが重要なのではないかと思います。そこで、中学校に対するPR活動をもう一工夫できないものかと考えたところ、平成14年度の二学期から本校が重点支援校に選ばれました。そこで、区立西新井中学校の2年生30名に本校に来てもらって、技術の授業を20時間程度、本校の教員が教えるという中高連携を行っています。本校は総合技術科という学科がありますが、主に機械系と電気系があることから、中学生30名を15名ずつ2つのグループに分け、20時間の授業を施すわけです。昨年からはスタートしたのですが、本校の教員が熱心さのあまり、時間をオーバーして授業をしたことが、今年の実施に向けての反省点となっています。また中学の方からは、もう少し受け入れ人数を増やして欲しいという要望も出ているのですが、受け入れ体制の限界もあるので、今後の検討課題として前向きに検討したいと思っています。

冒頭で地元の産業を支える人材を育てるという使命という話をされましたが、具体的に地元企業と連携して取り組むようなことはあるのでしょうか。

小林 在学中に実際の職業体験ができるインターンシップ制を本校でも実施しております。これは従来より区役所を通じて、各学校に枠が決められています。それを受けて2年生から希望者を募り、選んで送り出すというかたちになります。その他に今年は、若手経営者で組織する浅草紙器ゼミナールが訪ねて来られまして、そこに所属する35社もの企業で、本校からインターンシップを受けていただけることができるようになる運びです。足立区のインターンシップ制は募集枠がわずか3名ですので、このような業界からの申し出は大変喜ばしく、こちら

としてもぜひ受けようと思っています。

ただ、インターンシップに出すには、その間の保険など、諸費用がかかります。これをどうクリアするかなど、詰めるべき課題は残されています。ですが、実際の就業体験というのは、子どもたちにとって、いろいろな意味で刺激になるようです。インターンシップ制には今後も積極的に取り組んでいきたいと思っています。

その他に職業教育として力を入れていることはありますか。

小林 本校の伝統として、総合的な学習の時間の中で進路教育を行っています。入学したときから3年間かけて、自分の生き方や進路を考え決められる教育をしています。また、現在は普通科を希望する生徒が圧倒的に多く、つぶしが利くからという理由で、何となく普通科に進学し、大学に行こうかなといったように漠然と考えている生徒が多いのです。しかし、そうした生徒の中に、本来なら工業高校に来ればよいという子どももいます。工業高校からでも大学は行けますし、中学の段階からそのような子どもを発掘したいと考えています。そこで、希望者ではなく、ある学校の生徒まると全員に半日程度、本校の授業を受けてもらって感想を書いてもらうようなことができないものかと、私は今年の経営計画に書いてみました。

子どもたちにとっては非常にインパクトのある経験になると思いますし、これまでなら漠然と普通科希望をしていた子どもが、工業高校を見直すきっかけになるかも知れません。

生徒だけでなく、小中学校の先生にも、工業高校ならではの研修会を開いて、それを受けていただくということも昨年からは始めました。本当に今、高等学校はPRが大切な時代となっているのです。

卒業後のケア体制を築きたい

今後の課題をおうかがいます。

小林 一つは、高校の3年間という短期間の中で、いかにして子どもたちの専門性を高め、深化させるかということです。現在は2年生から専門の教育をスタートさせるのですが、何とか1年生の段階から専門教育が始められないものか。そこで2学期制を導入して、半期で単位がとれる授業を実施し、1年生の後期から専門的な授業に入れるようにしたいと考えており、検討を進めていくつもりです。

それから、PRの目玉として、来年2月の入試から、入試科目をこれまでの5教科5科目から、3教科3科目+面接に変えよう検討しています。要するに、一般入試でも人物を見ることに力を入れていきたいのです。成績だけで来るのではなく、本当にものづくりが好きで、工業高校に入りたいという意欲のある生徒を募っていきたくと思っています。

また、部活動の活性化にも注力していくつもりです。特に、文化系のバンド部などの活動を強化して、地域のお祭りなどの場で演奏会するとか、近隣の駅などでコンサートをやるなど、地域に密着しながら足立工業高校のPRにもなるような活動も行っていきたいと考えています。

最後に、進路関係での課題として、卒業生に対する進路指導を組織的にやれないものかと考えています。個別に進路指導の先生や担任を訪ねてくることはありますが、それを組織立てて取り組んでいる高校はまずないと思います。しかし、私はそのようなアフターケアは必要だと思います。

子どもたちは、卒業して就職してからさまざまな悩みを抱えます。高校生の就職は、定着率も低いですし、そういうときに子どもたちは、まず人間的なつながりのある人に相談したいものなのです。だから、就職したらそれでもう終わりというのではなく、さらに継続的にケアをしていく。このような教育の場を実現できれば、これは本当に素晴らしいことだと思いますし、ぜひ実現に向け努力していきたいと思っています。(了)